



独立行政法人 国立病院機構

四国こどもとおとなの 医療センター

アートプロジェクト

—今月のショット—



Royal Liverpool Children's Hospital



国立公園の中
にある病院



エントランスにある大きな
木の中は「祈り」の部屋に
なっている。

2015年 10月号

—院内の小さな声から—

英国の病院で実施されるアート予算はほとんどが寄付金によってまかなわれています。そしてその寄付金を集め運用し、病院にアートを提供する専門の慈善団体がいくつも存在しています。その団体と病院が協力し合って病院の環境をアートによって長期的な視点で改善しています。日本でも近年アートを導入する病院が増えてきましたが、病院の運営費からアートの予算を捻出する為、継続することは難しく、なかなか活動として定着しないのが現状です。院長を筆頭に病院幹部の英断により取り入れられた当院のアート活動は今では多くのボランティアによって支えられています。これからも病院の外部と内部が共に協力し合って「病院づくり」に参加できる、日本人らしいアート導入の方法を模索し続けたいと思っています。

—英国病院視察—

英国ではほとんど全ての病院が国によって運営されており、病院建設費の1%をアートに費やすというきまりがあります。そのためどんな病院にも何らかのアートが導入され、そのスタイルも様々です。多くの病院で専任や外部委託などによりアート専門のスタッフが配属されています。その背景には60年代に「コミュニティーアート」という言葉が登場し、文化による民主化(cultural Democracy)としてアートを社会包摂の手段として取り入れ、移民や貧困層の住民など、社会的弱者が自由に発言できる場を作ったという政策としての一面があります。「医療環境にアートは必要なもの」というしっかりとした文化的土壌があるために、時間をかけて細やかな検討と対話がなされた上でアートが導入されています。例えば、ある病院には2種類の庭があります。一つは誰でも散歩やリハビリが出来る大きな庭園。もう一つは壁と木で囲まれた小さな庭です。この小さな庭は Grief Garden(悲しみの庭)と呼ばれ、大切な人を亡くした方が誰の視線も気にする事なく一人で涙をながせる場所です。中央にある噴水の周りには気持ちを落ち着かせるブルーの花やハーブが植えられています。病院建築を構造物として枠組みから見るのではなく環境や空間として内側から患者目線で捉えようとするとき、そこに新たに必要なものが見え始めます。

—今月の1枚—



作家名: 高木さとこ

玩具をモチーフに描いています。玩具は手足がない人形もあれば遊ばなくなった玩具など様々な理由で私の所にやってきた物達です。もちろん、私が遊んでいた物もあります。そのモチーフを使い日頃感じている事を重ねて描いています。普段はどちらかというとシュールな作品が多いです。今回の作品は、見る人によって想像する世界が変化して、日によって違う物語が沸いてくるような物にしたいと思い作りました。私自身小さな頃を思い出すと、その頃の体験はいつまでも心に残り、大切な時間がいっぱいだったと感じます。そんな時期に病院での生活は決して楽しい時間ではありません。私の作品が嫌な思い出になってしまうかもしれませんが、そうなっても、何かしら感じたり、想像した事が、その後の人生の一部になって、必要な時間だったとなれば幸いです。